P-47

## 二重エネルギーX線吸収測定法（DEXA法）による骨密度測定と各種骨量パラメーターとの比較検討

（整形外科）
○三松興道　土肥慎二郎　香取庸一　松村卓洋
本山典哉　山本謙吾　今給黎篤弘　三浦幸雄

(目的)今回、正常成人と骨粗鬆症例に対し腰椎及び、肩関節の骨密度をDEXA法にて測定し、従来のX線学的計測(慈大式分類、Singhの分類、中手骨指数、大腿骨指数、椎体指数)、DIP法と比較した。さらに、骨代謝マーカーのうち、IOC、NOC、Pyr、Dpyr を測定した症例に関しても検討した。
(対象及び方法)健常成人132例男性30例、女性102例(22～94歳、平均55.9歳)骨粗鬆症例193例男性23例、女性170例(46～94歳、平均67.4歳)に対し骨密度測定装置Norland社製XR-26を用い腰椎前後方向、腰椎側面方向、肩関節前後方向(左上腕骨骨頭中心=肩CENTAR、頸部=肩NECK)を測定した。さらに骨粗鬆症と診断された52～89歳女性20例に対しIOC、NOC、Pyr、Dpyr を測定し検討した。
(結果と考察)腰椎側面、肩CENTAR、肩NECKではほぼ同様な加齢による減少傾向を示したが、腰椎前後方向では圧迫骨折、関節突起部の変形性変化、腹部大動脈の石灰化などがあった場合、有意に高値に測定された。高齢者で脊椎の変形性変化の強い症例では骨密度の測定法として肩関節正面測定法が有用で、より個体の骨環境を反映しているものと思われた。従来のX線評価法では、慈大分類、Singh分類が比較的各骨密度と相関がよく、個体の骨密度低下を反映しているものと思われた。DIP法の腰椎、肩骨密度との相関が期待に反し不良であるが、そのマススクリーニングとしての有用性については今後の調査課題としたい。骨代謝マーカーの調査では、高齢なほど骨形成系のマーカーが低値で、吸収系のマーカーが高値を示したが、各骨密度との間に明らかな統計学的傾向は認められなかった。これらは多彩な骨粗鬆症の病態を反映しているためと思われ、今後は各骨密度の経時的変化との対比による調査が必要であると思われた。

P-48

## 当科における顎関節鏡視下手術の現況

（八王子・口腔外科）
○原口浩見，小川　隆，高尾直伸
（口腔外科）
千葉博茂

顎関節の疼痛，雑音，運動不全の三徴候を示すいわゆる『顎関節症』の詳細な病態が明らかにされたのは，1970年代後半からである．顎関節症のうち顎関節内障クローズドロックと呼ばれる病態は，関節円板の非可逆的な前方転位によって生じ，有痛性の機械的開口制限を特徴とすることがこれまでの臨床研究で明らかになっている．初期の病態には下顎のマニピュレーションや治療用スプリントが奏功する場合も多いが，より進行した症例には外科的治療が適応となる症例も多い．一方本邦において顎関節症に対する関節鏡の応用は1975年大西により初めて試みられ，以来急速な進歩をとげた．最近では診断的関節鏡視所見から円板転位に伴った関節内の線維性癒着や滑膜炎がクローズドロック症例の病態の中心であることが明らかになった．これらに対して関節鏡視下に関節腔の癒着の剥離を行い，関節の授動を計る関節鏡視下剥離授動手術（arthoscopic lysis and lavage)が，効果的でより侵襲の少ない手術法として確立しつつある．今回，当科にて施行している関節鏡視下手術の現況について報告をする．